



筑紫女学園大学リポジット

A Study of "Duomaji" and "Weiduoji" in the Tang Dynasty : with Special attention to comparision Philology with Archaeology

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-02-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 桐島, 薫子, KIRISIMA, Kaoruko メールアドレス: 所属:
URL	https://chikushi-u.repo.nii.ac.jp/records/193

唐代に伝わった「堕馬髻」と「倭堕髻」・文献と文物の比較から・

桐 島 薫 子

A Study of “Duomaji” and “Weiduogji” in the Tang Dynasty
- with Special attention to comparison Philology with Archaeology -

Kaoruko KIRISIMA

はじめに

1 唐の国風と女性

北朝の気風を受けた唐王朝は、伝統的な思想や文化を継承する一方、東ローマや中央アジア諸国との交易で異文化を巧みに吸収して繁栄し、開放的な雰囲気を持つ文明国となった。また、中国唯一の女帝と言われる則天武后や政治・文学に大きな足跡を残した楊貴妃の登場に見られるように、女性たちが注目を集める時代でもあり、女性たちはそれまでより自由となり美意識も向上した。

そうした絢爛多彩な文化を反映した風俗（服装・化粧・髪型など）は、歴史書・文学作品・壁画・絵画・陶俑を通じて今日に伝えられている。特に象徴的なのが髪型で、美意識の向上に伴って多様化した状況

は、唐の段成式の『髻鬟品』や宇文士及の『粧台記』に詳細に記録された。

2 唐代の多様な髪型

まず、『髻鬟品』には次のようにある。⁽¹⁾
高祖宮、半翻髻・反縮染游髻有り。明皇帝宮中は、双鏡望仙髻・迴鶻髻。貴妃、愁来髻を作る。貞元中、帰順髻有り、又、閑掃粧髻有り。漢の梁冀の妻、堕馬髻を作る。長安城中、盤桓髻・驚鶻髻、又、抛家髻及び倭堕髻有り。

この内「堕馬髻」と「倭堕髻」は、孫寿と秦羅敷という女性故事に由来を持ち、歴代の詩歌に幾度も引用されてきた。⁽²⁾
また、『粧台記』にも次のようにある。

古今注に云つ、長安、盤桓髻・驚鵲髻を作すと。復た倭堕髻を作し、一に云う、梁冀の妻の堕馬髻の遺状なりと。

ここには、「堕馬髻」が「倭堕髻」をとどめた形状とある。それでは、二つの髪型はどのようなものだったのであろうか。

3 「堕馬髻」と「倭堕髻」の形状

「堕馬髻」について『漢語大詞典』巻二「堕馬髻」の説明(一二〇七頁)には、

古代婦女发髻名。

(訳) 古代女性の髻の名(髻は、毛髪を頭頂で束ね曲げたり折り返したりした髪型)

とあり、この後、『後漢書』梁冀の妻孫寿の髪型としての説明に続き、楊貴妃の姉の一行が描かれた「虢国夫人游春図」から、図1の挿絵が付けられている以後、本稿では、この類の髪型を「虢国夫人游春図」型と称す。



図1「堕馬髻」(『漢語大詞典』一九八八年より)

次に「倭堕髻」は、『漢語大詞典』巻一の「倭堕髻」の説明(一五〇八頁)に、

古代婦女的一种髮式・髮髻向額前俯偃。

(訳) 古代の女性の髪型の一つで、髪の毛を頭頂で束ね曲げたり折り返したりしたものが額の前に向かってうなだれている。

とあり、この後、「陌上桑」(「艶歌羅敷行」)、「日出東南隅行」に描かれた秦羅敷の髪型としての説明に続き、中塚村唐墓陶俑から図2の挿絵が付けられている。



図2「倭堕髻」(『漢語大詞典』一九八八年より)

4 もう一つの「堕馬髻」の存在

ところが、筆者は「堕馬髻」については、二〇〇六年十二月〜二〇〇七年三月、北九州市立いのちのたび博物館で開催された「驚異の地下帝国 始皇帝と彩色兵馬俑展・司馬遷『史記』の世界」に於いて、「虢国夫人游春図」型とは、全く異なるもう一つの髪型、即ち、前漢景帝陽陵の陪葬墓園M130号墓出土「塑衣式彩色女俑」の髪型(図3、4)を指摘する説が存在することを知った(以後、本稿では、この類の髪型を「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型と称す)。



図3 もつ一つの「堕馬髻」
前『漢陽陵』重慶出版
社二〇〇一年より



図4 もつ一つの「堕馬髻」
後『漢陽陵』重慶出版
社二〇〇一年より

そこで、展覧会の日中双方の関係各位に質問の書簡を送った所、詳細は第三章で述べるが、結果としては、「この説は、とりあえずそのように称しており、正しいか否かは、今後、検討する余地がある」との回答を得た。さらにその後、筆者は、①「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型が「堕馬髻」と紹介されている例が他にもあること、②絵画に描かれた「虢国夫人游春図」型の女性の髪型に対して、「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型の形状内容の解説が付されている例があることなどを知り、右記の検討が焦眉の急であると感じた。

そもそも筆者は、当初、唐代に於ける「堕馬髻」が、単に髪型の一つであるだけでなく、文学表現に多用され、当時の思想・文化傾向を知る上で重要なキーワードであると考え研究を進めていた。これに

いては、稿を改めて論じるが、本稿では、まず、唐代に流行した「堕馬髻」の特徴を文献（歴史書・文学作品）と文物（絵画・陶俑）を比較しながら考察し、次に、「堕馬髻」と似ていると言われる「倭堕髻」も同様の方法でその特徴を明らかにし、最後に、これらの結果を踏まえ、異なるもつ一つの「堕馬髻」に関して検討を加えてみたい。

第一章 「堕馬髻」について

1 孫寿故事と「堕馬髻」

『髻鬢品』に「漢の梁冀の妻、堕馬髻を作る。」とあつた梁冀（？）一五九）は、後漢順帝の皇后の兄に当たり、順帝の時に大將軍となつた。孫寿は、『後漢書』卷六十四「梁冀伝」に次のようにある。³⁾

詔して遂に冀の妻孫寿を封じて襄城君と為し、兼ねて陽翟の租を食ましむ。歳入は五千万、赤紱を加賜して長公主に比ぶ。寿は色美しくして、善く妖態を為し、愁眉・嗔粧・堕馬髻・折腰歩・齟齬笑を^な作して、以て媚惑を為す。

孫寿は高い地位と豊かな資材に恵まれて、「妖態（怪しげな科）」を作り、化粧は「愁眉」、「嗔粧（泣き化粧）」、髪型は「堕馬髻」、仕草は「折腰歩（なよなよした歩き方）」、表情は「齟齬笑（歯痛のとき作り笑い）」で、トータルとして「媚惑」をなしていた。さらに『後漢書』卷二十三「五行志」にも次のようにある。⁴⁾

桓帝の元嘉中、京都の婦女は、愁眉・啼粧・堕馬髻・折要歩・齟齬笑を作す。所謂愁眉は、細く曲折す。啼粧は薄く目下を拭き、啼処

の若し。墮馬髻は一辺に作り、折要歩は足は体下に在らず。顰齒笑は、齒痛の若く、楽しむも欣欣ならず。始め大將軍梁冀が家為す所なり。京都歎然として、諸夏皆放效す。此れ服妖に近し。

ここには、「墮馬髻」は「一辺に作る」形状とあり、それが大流行し都を席卷したことが記されている。

2 六朝の詩歌に描かれた「墮馬髻」

『粧台記』が引用したのは、晋の崔豹『古今注』の次の記載であった。

墮馬髻、今復た作る者無し。倭墮髻、一に墮馬の余形と云うなり。

ここには「墮馬髻」は「今復た作る者無し」と記されているが、後の梁代の沈約「江南曲」(『樂府詩集』卷二十六)には、

羅衣織成帶、羅衣織りて帯と成し

墮馬碧玉簪、墮馬には碧玉の簪

とあり、徐陵『玉台新詠』序文にも次のようにある。

鳴蟬の薄鬢(魏文帝の宮人が結った蟬の翼のように透いて見える髪型)を收ひ、墮馬の垂鬢を照らす。反まがりて金鈿を挿し、横

ざまに宝樹を抽く。

また、後魏の高允「羅敷行」(『樂府詩集』卷二十八)には、次のようにある。

邑中有好女、邑中に好女有り

姓秦字羅敷、姓は秦字は羅敷

巧笑美回盼、巧笑美しく盼回(流し目)し

鬢髮復凝膚、鬢髮 復た膚を凝らす

脚著花文履、脚には花文の履を著け

耳穿明月珠、耳には明月の珠を穿つ

頭作墮馬髻、頭には墮馬髻を作し

倒枕象牙梳、倒枕す 象牙の梳

詩中の「頭作墮馬髻」は、後述するように秦羅敷が詠出されたオリジナル作品「陌上桑」(「艶歌羅敷行」)、「日出東南隅行」には「倭墮髻」とある。それがここでは「墮馬髻」に入れ替わっているのである。

以上、「後漢書」からは「墮馬髻」は、孫寿が結い都中に流行した一辺に傾いた髪型であったこと、歴代の詩歌からは髪飾りを挿せるに足るボリユームの髪を結い上げたもので、「倭墮髻」と似通っており、詩歌で入れ替わって詠出された例もあつたことなどが確認できた。

3 唐代の詩歌に於ける「墮馬髻」

唐代になると、張昌宗が、則天武后の娘太平公主の宴に侍った際のことを詠んだ「太平公主山亭宴に侍す」(『全唐詩』卷八〇)中に、次のようにある。

扇掩將雛曲、扇は掩ふ 將雛の曲

釵承墮馬髻、釵は承く 墮馬の鬢

開元二十三年(七三五)に進士に及第した李頎の「緩歌行」(『全唐詩』卷一三三)には、妙齡の女性が「墮馬髻」を結っていたことを描いている。

二八蛾眉梳墮馬、二八蛾眉 墮馬を梳き

美酒清歌曲房下。美酒清歌 曲房（奥深い部屋）の下

中唐の白居易「書に代ふる詩一百韻、微之に寄す」詩（『白氏文集』0608）には、貞元末期に流行したファッションとして登場している。

粉黛凝春態、 粉黛 春態を凝らし

金鈿耀水嬉、 金鈿 水嬉に耀き

風流誇墮髻、 風流 墮髻を誇り

時世鬪啼眉、 時世 啼眉を鬪はす

（自注：貞元の末、城中復た墮馬髻・啼眉妝を為すなり。）

最後に晩唐の温庭筠（八一―八七二）「瑟瑟釵」詩（『温飛卿集外

詩』巻九）では、女性が釵を輝かせていたのが、墮馬髻であった。

翠染冰輕透露光、 翠染冰輕く 露光を透し

墮雲孫壽有餘香、 墮雲の孫寿 余香有り

以上、唐詩の「墮馬髻」もかんざしを挿すように結い上げられ、時に眉化粧とともに豪華さを増す雰囲気の中、詠出されていた。

4 絵画「虢国夫人游春図」と「墮馬髻」

遼寧省博物館所蔵「虢国夫人游春図」は、唐の張萱の作を宋代に徽宗が模写したものとされ、張彦遠著『歴代名画記』巻九には、

（長）萱、婦女嬰兒を画くを好み、妓女図・乳母将嬰兒図・按羯鼓図・

鞦韆図・虢国婦人出遊図有り。代に伝はる。

とあり、現在に伝わっている絵は張萱の原画の面影が残され、創作時の動機や意図が伺える作品と言われる。

この絵の女性の髪型を「墮馬髻」とする『漢語大詞典』の見解は、孫機著『中国古輿服論叢』「唐代妇女的服装与化妆」でも白居易の詩歌の自注を挙げて以下のように述べられている。

白居易《代书诗一百韵寄微之》中有「风流夸墮髻」句，原注：「贞元末城中复为墮马髻。」但墮马髻这一名称汉代已有。《后汉书·梁冀传》说梁妻孙寿作墮马髻，李注引《风俗通》：「墮马髻者，侧在一边。」汉代墮马髻的式样虽不能确知，但唐代再度使用这个名称，或者就是因为此时这种髻也是「侧在一边」的缘故。墮马髻中晚唐常見，徽宗摹张萱《虢国夫人游春图》中右起第四、五人，就梳着这种髻。

孫機氏は、漢代の「墮馬髻」の様式をはっきり知ることにはできないが、唐代にこの名称が再使用されたのは、「一方に片寄っている」ことが原因ではないかと言い、さらに、白居易の詩にもあるように中晩唐に頻繁に見られ、絵では右から四・五番目の人（図5）が結っているとしている。



図5 墮馬髻（『中国千年名畫』（人民美術一九九九年より）

ところで、「虢国夫人游春図」には、関連の深い詩（伝杜甫）一説に張祜）作「虢国夫人」詩がある。その詩に曰く、

虢国夫人承主恩、虢国夫人 主恩を承け

平明上馬入金門。平明馬に上り金門（一に「宮門」）に入る

却嫌脂粉澆顔色、却つて脂粉の顔色を澆すを嫌い

淡掃蛾眉朝至尊。淡く蛾眉を掃いて至尊に朝す

この詩と「虢国夫人游春图」との関係について、愛徳華・謝弗著、呉

玉貴訳『唐代的外来文明』では、

此画描绘了唐玄宗的宠妃杨玉环的三姐虢国夫人及其仆从出游赏春的情景。在侍从・侍女和保姆的陪伴下，中间并行的二人为虢国夫人与秦国夫人，两人正相互交谈着什么。

（訳注）

この絵画は、唐の玄宗の寵妃楊玉環（楊貴妃）の（国夫人と号された三人の姉の）三番目虢国夫人と従者が春景色を觀賞する情景を描いている。侍従、侍女と子供の世話のお供を連れ、真ん中に並んで進んでいる二人が虢国夫人と秦国夫人で、二人はちょうど互いに何かを話している。

と述べ、沈從文編著・古田真一・栗城延江共訳『中国古代の服飾研究』では、

唐代の「虢国夫人は主の恩寵を承け、夜明けに馬に乗りて宮門に入る。白粉で顔色を汚すを嫌い、ただ淡く蛾眉を掃き天子に参朝する」と風刺した詩を図解したものであろう。

と述べている。これらの説を合わせると、絵の中心の「墮馬髻」の二人は、虢国夫人と秦国夫人ということになる。その真偽の程は明らかでないにしても、唐代の高貴な女性が「墮馬髻」を結っていたのは物

質的豊かさに支えられた孫寿が「墮馬髻」を考案・体現したことと条件的には合致する。

また、虢国夫人と秦国夫人の妹楊貴妃の好んだ髪型については、『新唐書』卷三十四五行志に、天宝の初めのこととして、次のような記述がある。

楊貴妃は常に假髻を以て首飾と為し、好んで黄裙を服る。服妖に近し。時の人、之が為に語りて曰はく、「義髻河裏に抛てられ、黄裙逐に水流す」と。

楊貴妃の「假髻」（「義髻」）については、はっきりは分らないが、想定する資料として、『晋書』卷二十七五行志に、次のようにある。

太元中、公主・婦女必ず髻を緩め髻を傾け、以て盛飾と為す。用ひた髪既に多く、恒に戴すべからず。乃ち先に木及び籠の上に之を装ひ、名づけて假髻と曰ふ。或いは仮頭と名づく。貧家に至つては自ら辦ふること能はず、自ら無頭と号し、就ち人頭を借りるなり。遂に天下に布す。亦た服妖なり。

この記述を踏まえると、「假髻」や「義髻」は、たつぷりの「そえ髪」を常に頭上に載せておくことはできないので、木や籠に髻を緩やかに結い髻を傾けて結った「かつら」であったと考えられる。髻を傾けたというシンメトリーな結い方や服妖と見なされていた点は「墮馬髻」と共通している。斎藤龍一編『大唐王朝 女性の美』展図録には、

盛唐期以後の髪型はさらに種類が多くなったが、その主な特徴はいわゆる「危」（傾くようす）、「重」（髪の色が多いため、重そうにみえる）、「怪」（かわったようす）である。

とあり、「墮馬髻」流行の傾向を物語るものと言えよう。

5 絵画「宮楽図」と「墮馬髻」

台湾の国立故宮博物院所蔵「宮楽図」(図6)は、清朝内府の目録『石渠宝笈』続編では元人作とされていたが、描かれた女性が中唐より晩唐にかけての風俗を色濃く伝えていることから、現在は唐人の作と見なされている。¹⁶⁾『唐代的外来文明』には、

有的发髻梳向一侧，是为「坠马髻」；…凡此，都符合唐代女性的装束。

と「墮馬髻」の女性が描かれ唐代の服装に合致している、とある。¹⁷⁾同書はどの女性かは示していないが、図7のように髻が一方に傾く女性が四人描かれている。この頭髮は、「虢国夫人游春図」型と言える。



図6)『宮楽図』上海人民美術出版社二〇〇一年より)



図7)『宮楽図』上海人民美術出版社二〇〇一年より)

6 陶俑と墮馬髻

絵画以外でも、孫機著『中国古輿服論叢』「唐代妇女的服装与化妆」では、西安王家墳唐墓出土の女俑(図8)の髪型を「墮馬髻」としており、特徴的には「虢国夫人游春図」型と共通している。¹⁸⁾



図8)『中国古輿服論叢』文物出版社二〇〇一年より)

第二章 「倭墮髻」について

1 秦羅敷の故事と「倭墮髻」

「倭墮髻」が最初に現れるのは次の作品である。

秦氏有好女、秦氏に好女有り

自名爲羅敷、自ら名づけて羅敷と爲す

羅敷憲蠶桑、羅敷 蚕桑を憲む

採桑城南隅、桑を採る 城南の隅

青絲爲籠係、青糸をば籠係ろうけい（籠のつりひも）と爲し

桂枝爲籠鉤、桂枝をば籠鉤ろうけい（籠のつって）と爲す

頭上倭墮髻、頭上には倭墮の髻

耳中明月珠、耳中には明月の珠

この後の内容は、道行く者たちが美しい羅敷に見とれる様子や「使君」（郡の長官）が来て羅敷を誘うが、彼女は立派な夫がいると言って拒絶したことが描かれている。

この作品は、『樂府詩集』卷二十八「相和歌辞・相和曲」には「陌上桑」として収められているが、『宋書』「樂志」には「艶歌羅敷行」、「玉台新詠」には「日出東南隅行」と題されている。誰が何時作ったのかについては、『樂府詩集』引く崔豹『古今注』に、次のようにある。¹⁹⁾

「陌上桑」は、秦氏の女子より出づ。秦氏は邯鄲の人、女の羅敷と名のる有りて、邑人の千乘王仁の妻と爲る。王仁後に趙王の家令と爲る。羅敷出でて桑を陌上に採り、趙王台に登り見て之を悦ぶ。因りて酒を置き、焉を奪はんと欲す。羅敷巧みに箏を弾じ、乃ち「陌上桑」の歌を作りて以て自ら明らかにす。趙王乃ち止む。

しかし、次の①～③の説が指摘するように、曲としての「陌上桑」は前漢に成ったらしいが、歌辞は同時代に書かれたという見方はされて

いない。²⁰⁾ そうであれば、その出現は漢代以降であった可能性がある。

① 増田清秀著『樂府の歴史的研究』には、「陌上桑」「江南曲」「鷄鳴」「白頭吟」らも、前漢の歌曲らしいが、傳存歌辭に問題がある」とある。

② 小田美和子「陌上桑「日出東南隅篇をめぐる」には、「日出東南隅篇が「陌上桑」の古辞ではない可能性もある。…古曲「陌上桑」は、古典名の常として、元は「陌上桑」三字を冒頭句とする民謡だったと考えられる。」とある。

③ 胡志昂「漢樂府「陌上桑」考」には、「魏晉時代の宮廷文化において樂曲と樂詩の復旧と新作が競い合い隆盛を極めていた。…「艶歌羅敷行」は、正にこのような時に逢って樂府の旧辞から新たに編成されたものである」とある。

2 六朝・唐代に於ける「倭墮髻」

梁の徐伯陽「日出東南隅行」（『樂府詩集』卷二十八）には、次のようにある。

遠映陌上春桑葉、遠く映る 陌上の春桑葉
斜入秦家細綺衣、斜に入る 秦家の細綺きよき（浅黄色のあざぎぬ）の衣
羅敷妝粉能佳麗、羅敷の妝粉 能く佳麗なり
鏡前新梳倭墮髻、鏡前新たに梳く 倭墮髻

唐の許景先「折柳篇」（『全唐詩』卷一一一）には、次のようにある。

寶釵新梳倭墮髻、宝釵新たに梳く 倭墮の髻

錦帯交垂連理襦 錦交はり垂る 連理の襦(うすぎぬ)

以上から「倭堕髻」は、頭上に結び上げた髻であり、梁代には麗しい化粧と共に詠出され、唐代にもかんざしが輝く髻として描かれていたことが確認できた。

3 文物に於ける「倭堕髻」との比較

「倭堕髻」とされる陶俑には、図9、(中塚村唐墓陶俑)、図10(唐8世紀前半)があり、ともに髻が額にかかるとともに頭上に結われ、文献の「倭堕髻」の描写と合致している。また、文献と絵画・陶俑から「倭堕髻」と「堕馬髻」が相似形とされていたことも首肯できる。



図9 『大唐王朝 女性の美』 中日新聞社二〇〇四年より)



図10 『大唐王朝 女性の美』 中日新聞社二〇〇四年より)

第三章 もう一つの「堕馬髻」

1 前漢墓「陽陵」の女俑と「堕馬髻」

本稿「はじめに」で挙げた「司馬遷『史記』の世界」に展示されていた前漢咸陽市陽陵陪葬墓園M130号墓出土、塑衣式彩色女俑「女官俑」(図3、4)に関しては、展覧会の図録に以下の解説が付されていた。⁽²⁾

頭髪は漢代に流行した堕馬髻^{だまかう}と呼ばれる髪型で、長い髪を肩の後ろで束ねて折り返し、一部をさらにそこから下に垂らしている。

当時、偶然にも「堕馬髻」を調べていた筆者は、この漢陽陵女俑の髪型とその解説に疑問を持ち、展覧会の日中両国の関係各位に、書簡を以って質問を試みた所、幸い返信を頂くことができた。ここに、各位のご厚情に感謝するとともに、返信の内容を紹介し、それらによって分ったことを述べていくことにする。

まず、展覧会企画及び図録編集を担当された博報堂事業プロデューサー小田部英勝氏からは、解説文の執筆者に問合せるとともに参考文献についても改めて調査をして回答する旨のご返信を頂いた。続いて、解説文の執筆者である愛知県陶磁資料館学芸主任の森達也氏から返信があり、図録の作品解説の資料は、陝西省考古研究所編『漢陽陵』(重慶出版社二〇〇一年)の九頁「髪形」項の記載であることをご教示頂いた。⁽²⁾

陽陵は、漢の景帝と王皇后の同墓不同穴の合葬陵園である。漢の景帝は、前漢第四代目の皇帝で、恵帝七年(前一八八)に生まれ、三十

二歳の時に即位、在位は十七年であった。一九九〇年以来、大規模な発掘調査が行われ、その成果をまとめたのが、森氏が示された『漢陽陵』である。以下に、該当箇所（同書中の日本語訳）を挙げる。

またの名を堕髻という。梳いているときに真ん中で分け、こめかみを通して頸の後ろでひとまとめにし、髻を引き上げた後背中に垂らす。髻中から引き出した髪を垂らす。この髪型は漢代に始まり、一時期流行したが、東漢以降は結つものが減り、魏晋時代にはほとんど見られなくなった。婦女の髪型の中でも比較的重んじられたものである。陪葬墓園M130号墓出土の彩色女俑は全てこの髪型であった。

その後、さらに筆者のもとには「塑衣式彩色女俑」を所蔵する中国の漢陽陵考古陳列館の李庫氏から、図録の編纂に参加した関係各位に連絡をした上で筆者が提起した問題に回答する、とした返信を頂いた。紙面の都合上、ここでは本稿と直接関連する箇所の質問及び回答を示し、それぞれに日本語訳を付ける。

① 筆者の質問

質問内容（中国関係各位への書簡より）

図録中说《塑衣式彩色女俑（女官俑）》の发型叫做「堕馬髻」。持此见解之根据是什么？请告知。

比如说：关于「堕馬髻」，上述《后汉书》《五行志》有「作一邊」之解释。那，西汉阳陵出土的《塑衣式彩色女俑（女官俑）》的

「堕馬髻」也有这样的文献记述吗？ 如果，根据文献以外的参考资料的话，也万请告知。

日本語訳（日本との関係各位への書簡より）

図録では「塑衣式彩色女俑 女官俑」の髪型が「堕馬髻」と呼ばれるものであると解説されていますが、これはどのような資料が根拠になっているのでしょうか？ご判断された文献資料、もしくはそれに代わる資料をご教示頂けますよう、お願い申し上げます。

例えば、前述の『後漢書』では「堕馬髻」は「堕馬髻者、作一邊」と説明されています。

② 漢陽陵考古陳列館の李庫氏の回答

- 1、汉阳陵塑衣式彩绘女俑出土于汉阳陵陪葬墓中，根据研究知，该陪葬墓属于西汉早期；同样法式的女俑在西安任家坡汉墓、湖北凤凰山汉墓等也有出土。故这种法式在汉代较为流行。
- 2、这种法式与堕马髻的描述几乎相同，我们权且用之，是否正确，可以商榷。

日本語訳（本稿用に訳したもの）

1、「漢陽陵塑衣式彩色女俑」は、漢陽陵陪葬墓から出土した。研究によると、当該の陪葬墓は前漢の初期に属するもので、同様の作法の様式の女俑は、西安市の任家坡漢墓・湖北省の鳳凰山漢墓などからも出土している。故に、この法式は漢代に於いて比較的流行していたものである。

2、この種の法式と墮馬髻の描写は、ほとんど同じであり、我々はとりあえずこれを用いたもので、正しいか否かは、検討する余地がある。

これにより、漢陽陵の女俑の髪型が「墮馬髻」とされているのは、「叔且」、即ち「とりあえず」⁽²³⁾であることが明らかとなり、まさしく再提起があったように、「商榷」即ち、「検討する」ことが必要と分かった。

2 もう一つの「墮馬髻」説の広がり

このように「漢陽陵塑衣式彩色女俑」の髪型を「墮馬髻」とする見解は検討が必要であるにもかかわらず、既に広がりを見せていた。例えば、周汛・高春明著『中国歴代婦女妝飾』に、次のようにある。⁽²³⁾

名重一時的墮馬髻，便是垂髻的一種。關於它的出現，衆說紛紜，有說它產生於漢武帝時代，有認為是始於漢桓帝。這種髮髻的主要特點是下垂至肩背，側在一邊。南朝徐陵《玉臺新詠·序》稱：「妝鳴蟬之薄鬢，照墮馬之垂髻。」唐李賢註《後漢書·梁冀傳》時引《風俗通》也稱：「墮馬髻者，側在一邊」；這種髮髻樣式在漢代的文物資料中仍可看到，如山東臨沂銀雀山漢墓出土的陶俑；廣西貴縣羅泊灣漢墓出土的木俑；陝西長安洪慶村、西安任家坡等地出土的陶俑（圖版12）；湖北雲夢、江陵等地出土的彩繪木俑（圖版13）以及湖南長沙馬王堆漢墓出土的著衣木俑等。儘管出土區域分佈很廣，但這些泥塑和木俑的髮髻樣式都很相似，皆由正中開縫，分髮雙鬢，至頸後漸漸收束，挽髻於背。粗看起來，這種髻式與椎髻比較相近，不過它另在髻中分出

一綫頭髮，朝一側垂下，給人以髮髻散落之感，這正是墮馬髻的基本特徵所在。墮馬髻雖然風靡一時，但流行時間不很長，東漢以後，梳這種髮髻的婦女漸少，至魏晉時，已完全絕迹

（日本語訳）

一時期世に名を知られた墮馬髻は、即ち垂れた髻の一種である。その出現に関しては諸説紛々で、前漢武帝の時代に生まれたと言われたり、後漢桓帝の時に始まったと言われたりしている。この種類の髻の主な特徴は肩や背中の後ろまで垂れ下がり、一方に傾いていることである。南朝の徐陵『玉台新詠』の序には、「鳴蟬の薄鬢を妝ひ、墮馬の垂髻を照らす」とある。唐の李賢は、『後漢書』の梁冀伝の注釈をする際にも『風俗通』を引用して「墮馬髻者、側の一辺に在り」と言っている。…この種の髻の様式は、漢の時代の文物資料に多く見ることができる。例えば、山東省の臨沂銀雀山の陶俑、広西壮族自治区の貴県羅泊湾漢墓出土の木俑、陝西省長安洪慶村・西安任家坡などから出土した陶俑（図版12）（本稿図11）、湖北省雲夢・江陵等から出土した彩繪木俑（図版13）（本稿図12）及び湖南省長沙馬王堆漢墓出土の着衣の木俑である。出土した区域は、広範囲に分布しているが、これらの泥の塑像と木俑の髪型様式はとも似ており、全て真ん中から髪をこめかみに向けて分け、頸の後ろでゆるやかに束ね、背中で髻をまくり上げている。大まかに見ると、この種の髻の形式は椎髻と比較的近似しているが、これは髻の途中で頭髮の束を取り出して、一方に向かって垂れ下げており、髻の髻がばらばらになって

落ちていた印象を与え、まさに堕馬髻の基本的な特徴がある。堕馬髻は一時期、一世を風靡したが、流行した時間はそれほど長くなく、後漢以降、この種の頭髪を結う女性は次第に減少し、魏晋の時には既に完全に途絶えた。



図11 図版12 『中国歴代婦女妝飾』三聯書店・上海学林出版社 一九八八年より)



図12 図版13 『中国歴代婦女妝飾』三聯書店・上海学林出版社一九八八年より)

この説明に関しては、次の問題点・疑問点があると思われる。

- ① 前漢墓出土の髪型を、後漢に「堕馬髻」を流行させた孫寿の記述を資料として説明しながら、「後漢以降、この種の頭髪を結う女性は次第に減少」としており、論述に矛盾がある。
- ② 「堕馬髻」の出現時期の漢代武帝説に関する根拠が示されていない。
- ③ 「堕馬髻」の主要な特徴を肩までの「垂髻」とし、『玉台新詠』序文を引用しているが、本稿でも既に挙げたように序文には、「堕馬髻」に髪飾りを挿す描写が続いており、それが可能な髪型でなければならぬ。しかし、例に挙げられた女俑類はそうっていない。

④ 魏晋時代以降には完全に途絶えていたとしながら、後の梁代の文献である『玉台新詠』を引用している。

⑤ 「堕馬髻」と相似形とされた「椎髻」(図13)は、同書では「堕馬髻」説明の前項で、『後漢書・逸民伝』を挙げ、隠者梁鴻の妻孟光がしたものであることを述べている。しかし、孟光は極めて質素な衣服・髪型として「椎髻」をしたもので、後漢の將軍の妻孫寿が権力と富を背景に化粧や仕草とともに完成させたトータルな「媚惑」の一要素である「堕馬髻」と似ているというのは違和感がある。



図13 『中国歴代婦女妝飾』三聯書店・上海学林出版社一九八八年より)

3 二つの「堕馬髻」の混同

武田雅哉著『楊貴妃になりたかった男たち・衣服の妖怪』の文化誌・『では、「服妖」について系統的に分かりやすく説明されている。しかしながら、「堕馬髻」については、形状が異なる「虢国夫人游春図」型と「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型の二つの「堕馬髻」が混同されていると思われる。即ち、『後漢書』「五行志」の記述を挙げた後、「堕馬髻」の説明として次のような文章と挿絵が記されている(傍線部分は、後の説明のために本稿の筆者が付したものである。)

「落馬ヘア」は、原語では「堕馬髻」といふ。髪を梳く際に、ま

なかから両のこめかみに向けてふたつに分け、首のうしろでひとつにまとめ、背中のほうに垂らすというものだ(図2・1)。まっすぐに垂らすのではなく、左右どちらかに傾けて結ぶ。落馬した時に、髻がほどけて散じた様子に似ているというので、この名がついた。その対称性の破壊のゆえに、飘逸でラフな雰囲気がかもさせたのだらう。



図2-1 落馬ヘアの例(唐代)

図14 『楊貴妃になりたかった男たち・衣服の妖怪』の文化誌・講談社二〇〇七年より)

傍線部分は、「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型を説明した内容で、周汛・高春明著『中国歴代婦女妝飾』の記述と一致している。ところが、「図2・1」(本稿図14)に挙げられた髪型は、「宮楽図」(本稿図7)からと思われ、「墮馬髻」は頭上に結び上げて傾けたもので、「虢国夫人游春図」型である。

おわりに

以上、唐代に伝わった孫寿の「墮馬髻」は、『後漢書』に記述されたように一方に片寄っており、髻は歴代の詩歌が描写したように頭上に豊かに結び上げられ、そこには宝石の髪飾が輝き、意匠を凝らした

化粧とあいまって豪華な雰囲気を醸し出す、虢国夫人游春図」型であったと考えられる。「墮馬髻」と似ているとされ、詩歌で入れ替わって詠出された「倭墮髻」が同じく頭上に結われた髻であったこともその傍証と言えよう。唐代は、楊貴妃の義髻に見られるように、手間暇がかかるアンバランスな髪型が好まれた可能性が高く、「墮馬髻」の流行もそつした豊かさ・豪華さ・趣向の流れの中にあつたと思われる。

一方、「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型は、①後漢の孫寿の生きた時代以前の陵墓からの出土であること、②歴代の文学作品で描写されていたような頭上にかんざしを挿すことはできない髪型であること、③大將軍の妻孫寿が好んだ髪型とは本質的に異なり、むしろ質素且つシンプルなものであることなどから、『髻鬢品』や『粧台記』が記し、唐代に流行した髪型とは違ったものと考えられる。

従って「漢陽陵塑衣式彩色女俑」型については、少なくとも後世に伝わった「墮馬髻」とは異質である。仮に後漢の孫寿以前に「墮馬髻」の基となる髪型が存在したとして、「墮馬髻」の変遷史上に位置するものなのか、それとも「墮馬髻」とは全く別系統の髪型であったのか、その判断をするには、新たな資料の出現を待たねばならないであろう。

注

本稿に引用した『髻鬢品』、『粧台記』は、重校『說郛』弓第七十七、白居易の作品は、那波本『白氏文集』(四部叢刊初編)を底本とし、自注は

- 北京図書館所蔵南宋紹興刊本（一九九五年、北京文学古籍刊行社景印）に
 拠り、岡村繁著『白氏文集』巻三（一九八八年）、巻九（二〇〇五年）を
 参照し、花房英樹番号を付した。その他は、『楽府詩集』（中華書局）、張
 昌宗・李頎・許景先らの作品は、『全唐詩』（中華書局）、温庭筠の作品と注
 は曾益等箋注『温飛卿詩集箋注』（上海古籍出版社）、杜甫の作品と注は仇
 兆鰲著『杜詩詳註』（中華書局）を、底本とした。また、『號国夫人遊春圖』
 と、『號国夫人遊春図』の表記は、それぞれの文献に拠った。
- 1 「高祖宮有半翻髻・反縮樂游髻。明皇帝宮中雙銀望仙髻・回鶻髻。貴
 妃作愁來髻。貞元中有歸順髻又有間掃粧髻。漢梁冀妻作墮馬髻。長安
 城中有盤桓髻・驚鵲髻又拋家髻及倭髻髻。」
- 2 「古今注云、長安作盤桓髻・驚鵲髻。復作倭髻髻、一云梁冀妻墮馬髻
 之遺狀也。」
- 3 「詔遂封冀妻孫壽爲囊城君、兼食陽翟租、歲入五千萬、加賜赤紱、比
 長公主。壽色美而善爲妖態、作愁眉、嗔粧、墮馬髻、折腰步、齟齬笑、
 以爲媚惑。」
- 4 「桓帝元嘉中、京都婦女作愁眉・啼粧・墮馬髻・折要步・齟齬笑。所
 謂愁眉者、細而曲折。啼粧者、薄拭目下、若啼處。墮馬髻者、作一
 邊。折要步者、足不在體下。齟齬笑者、若齒痛、樂不欣欣。始自大將
 軍梁冀家所爲、京都歛然、諸夏皆放效。此近服妖也。」
- 5 「墮馬髻、今無復作者。綬墮髻一云墮馬之餘形也。」（『古今注』下
 四部叢刊）
- 6 「妝鳴蟬之薄鬢、照墮馬髻之垂鬢。反挿金鈿、橫抽寶樹。」
- 7 「萱好畫婦女嬰兒。有妓女圖・乳母將嬰兒圖・按羯鼓圖・鞞韞圖・號
 國婦人出遊圖。傳於代。」
- 8 吳同「章宗題天水摹張萱號國夫人遊春圖小考」（國立故宮博物院編輯委
 員會『中華民國八十年中國藝術文物討論會論文集』一九九二年）
 に、「此二摹本即遼寧博物館所藏的〈號國夫人遊春圖〉及波士頓博物館
 藏的〈搗練圖〉。這兩卷摹本有一共同的特點、即均以宋人的筆、墨、
 彩法、摹制唐代人物畫名作、因而不但留下原跡的面目、而且尚可一窺
 當初畫家創作的動機及原意。」とある。
- 9 文物出版社二〇〇一年二四三―二四四頁
- 10 仇兆鰲『杜詩詳註』巻二（中華書局）。
- 11 愛德華・謝弗著、吳玉貴訳『唐代的外來文明』（陝西師範大學出版二
 〇〇五年）十九頁。
- 12 沈從文編著・古田真一・栗城延江共訳『中国古代の服飾研究』所收
 「77『號国夫人遊春図卷』」（京都書院一九九五年）二七一頁。
- 13 「楊貴妃常以假髻爲首飾、而好服黃裙。近服妖也。時人爲之語曰「義髻
 拋河裏、黃裙逐水流。」
- 14 「太元中、公主婦女必緩鬢傾髻、以爲盛飾。用髮既多、不可恒戴、乃先於
 木及籠上裝之、名曰假髻、或名假頭。至於貧家、不能自辦、自號無頭、就
 人借頭。遂布天下、亦服妖也。」
- 15 中日新聞社二〇〇四年 一一九頁
- 16 小川裕充監修『故宮博物院第1巻 南北朝～北宋の絵画』（日本放送
 出版協会一九九七年十一月刊行）八十頁。
- 17 八頁。この絵に関しては、国立故宮博物院HPにも同様の見解がある。
 （[http://www.npm.gov.tw/ja/collection/selections_02.htm?docno=697&
 cano=15](http://www.npm.gov.tw/ja/collection/selections_02.htm?docno=697&cano=15)）
- 18 二四一頁。
- 19 「崔豹『古今注』曰、「陌上桑」者、出秦氏女子。秦氏、邯鄲人有女名羅
 敷、爲邑人千乘王仁妻。王仁後爲趙王家令。羅敷出採桑於陌上、趙王登臺
 見而悅之、因置酒欲奪焉。羅敷巧彈琴、乃作「陌上桑」之歌以自明、趙王
 乃止。」
- 20 ①『樂府の歴史的研究』（創文社一九七五年三月）二十九頁、②「陌
 上桑」日出東南隅篇をめぐって」（岡村貞雄博士古稀記念中国学論

- 集』一九九九年八月)二頁、③「漢楽府「陌上桑」考」(『埼玉学園大
学紀要』創刊号二〇〇一年発行)十四頁。
- 21 『始皇帝と彩色兵馬俑展・司馬遷』史記』の世界・『図録』(TBSテ
レビ・博報堂二〇〇六年発行)一四五頁。
- 22 併せて作品解説(一四五頁)の「墮馬髻」は、「墮馬髻」の誤植であ
ることもお知らせ頂いた。
- 23 「叔旦」の訳は『中日辞典』(小学館)、『中国語大辞典』(角川書店)
を参照。
- 24 「商榷」の訳は『中日辞典』(小学館)、『中国語大辞典』(角川書店)
を参照。
- 25 三聯書店・上海学林出版社一九八八年刊行 二十頁
- 26 拙論「孟光故事の変容・白居易の妻と北条政子」(『日本中国学会
報』第五十三集二〇〇一年十月)参照。
- 27 講談社二〇〇七年一月 二十頁